日本の古都はなぜ空襲を免れたか

[redacted]

朝日文庫

日本の古都はなぜ空襲を免れたか　吉田守男

よ 10-1

210ヨ

9784022613530

19201121006400

京都・奈良・鎌倉など、貴重な文化財の残る古都が米軍の空襲を免れたのは、その価値を認めてくれたからだ、という「定説」は、まったくデタラメだった！ それどころか、京都は第三の原爆投下目標のひとつだったのである。その証拠を丹念に洗い出し、この俗説が流布・信奉された理由を暴く。

ISBN4-02-261353-X C0121 ¥640E

朝日新聞社　定価：本体640円＋税

255637020

15022013
(東)

ない程度の限定的な爆撃であった。つまり、〈爆撃禁止命令〉はほぼ完全に守られていたのである。

次に、京都にも大規模な空襲の可能性があったことについて触れておこう。

京都の空襲に関して、米軍公刊戦史は次のように記している。

京都は、三回の小爆撃を受けたが、これらは全て故意の爆撃ではなかった。

しかしこの記述は誤りである。少なくとも、一九四五（昭和二〇）年一月一六日の京都市東山区馬町の空襲に関する限り、B29一機の来襲とはいえ、計画的な爆撃だと考えざるをえないからである。

松原警察署の調べによれば、この日の午後一一時二三分頃、B29一機が三重県境より滋賀県を経て京都市内に侵入し、京都市上空を一周した後、投弾した。

この結果、死者四一人、負傷者四八人、被害家屋三一六戸の災害をこうむった（『かくされていた空襲』）。他の都市の空襲と比べれば極めて軽微なものではあるが、六月二六日の西陣出水地域の空襲と共に、数少ない京都空襲の一つである。

当時、東山中学校の校長であった須賀隆賢はこの模様を日記に記している。

●昭和二〇年一月一六日（火）晴　寒

登校、授業。午後三時近く下校。五時近く帰宅。十（ママ）四日、敵機伊勢外宮豊受（とゆけ）大神聖域へ爆弾投じ、神楽殿、神舎など六、七棟被害。ご本殿安泰。いよいよ思想戦となった。国体概念にひびを入れ、神国への自信を破壊しようと不逞暴虐の挙に出たのだ。万国無比、国体の破却をめざしていることは明白だ。

一六日夜分一一時半ごろ、突然、ブルブルンと異常な飛行機のうなりが聞こえる。これが地ひびきをたてて、旋回しているらしい。これは敵機、はて、警報も出ていないが。とびおきて空を見る。星がふっている。ところが、ドカンドカン。ブルブルとガラス戸が大震動。これはと思い表へ出たが、もう何事もなく静まりかえって別条はないがなと入って寝たところへ、警報が出た。一機、三重から脱去（ママ）……

●一月一七日

今朝学校へ行くと、東山学区内爆弾投下、被害とのよし。渋谷道だとのこと。そのうちに四年本江源一が傷害、二年井上孝哉が重傷との報。いよいよ大変と、午後石井、貫井と三人見舞、視察。防空用員章がものをいって入った。女専第一小松寮の一つがやられている。幼稚園がひどい。柴垣妙子は第三寮で無事。井上と本江の家のまん前にドカンと落ちた。近所はこっぱみじん。目もあてられぬ。ちょうど本江の兄のかたが元気で、あと片づけ中。ばあさんレキが重傷で府立病院。女の子（七つ）即死。井上は父負傷、

母重傷。本人は、頭と左足の骨が折れた。妹が腹部貫通で即死。その間に寝ていた小さな妹は微傷もないと。その辺一帯家屋倒壊。少し東、火災で焼けている。北側は爆風で戸、障子めちゃめちゃ。ガラス惨憺（さんたん）、各教室惨憺たるもの。死者も三、四〇はあろう。傷者は数倍か。京都最初の空爆である。これで市民も覚醒するだろう。この夜は暗かった。

〔前掲『かくされていた空襲』〕

同じく、この日の空襲を体験した山崎昭見は次のように言う。

京都はいつもその上空をB29の大編隊が通過するのを見上げるのみで今日は京都か、今日は京都かと、空襲警報がなるたびに、ひやひやしながらついに敗戦を迎えることになった。

〔同右〕

たしかに、京都は名古屋地方が爆撃される際の飛行コースに入っていたから、上空をB29の編隊が通過することは多かったのである。ところが、この日のB29の行動は、京都幼稚園の一花一枝によれば、「いつもと違う飛行機の飛びかたに不安を感じ」た。それは低空を旋回していたからだという〔同右〕。

米軍史料「攻撃データ」*は、この日の京都への爆撃に関して次のように記録している。つ

まり、一月一六日、B29一機は第一優先順位で爆撃を加えた。高度二万三、八〇〇フィート（七、二五四メートル）から高性能爆弾三トンを投下したと。

＊ USSBS, Statistical Reports Covering Allied and U. S. Air Forces Attack Data, 1945–1946.

このB29の爆撃について問題点が三つある。

その第一は、B29の所属部隊が「8888」となっていることである。こんな番号で表示される航空団は存在しない。これは伏せ字なのである。「攻撃データ」の所属部隊欄は普通、五八Wとか三一四Wとなっている。前者は第五八航空団、後者は第三一四航空団のことであり、共にグアムに司令部を置く第二〇航空部隊の指揮下にあった飛行団であった。マリアナ諸島に基地を持つ飛行団に第八八八航空団などは存在しないのである。

そこでここでは、謎の「8888」のことを〝エイト・フォー〟と呼んでおこう。テレビのコマーシャルでおなじみの女性用商品の方は脇の下のにおい消しのようだが、ここでの〝エイト・フォー〟は所属部隊消し（隠し）なのである。

米軍史料「攻撃データ」に掲載された膨大なB29の出撃データのなかに、この〝エイト・フォー〟が約三〇〇回ほど出てくる。そのうちの五〇回は正体が判明している。それは第五〇九混成群団、つまり原爆投下専門部隊である。これは、原爆投下の練習を日本本土で五〇回にわたって実施した飛行の件である（後述）。また、広島・長崎へ原爆投下に出撃したB

29もこの〝エイト・フォー〟と表示されている。これらは原爆問題が極秘事項だから、その所属部隊を隠したのである。それでは残りの二五〇回の〝エイト・フォー〟の正体は何であろうか。

この件については現在、次の点が判明している。

① それら約二五〇回の〝エイト・フォー〟は、B29の単機飛来が圧倒的に多いこと。複数の場合でもせいぜい二、三機での来襲である。

② B29は通常七トンの爆弾を積み込んで来襲するのだが、〝エイト・フォー〟のB29はせいぜい三トン程度しか積んでいないこと。

③ 攻撃は必ず第一優先順位の目標をねらっている。

④ 時期は一月から五月に集中している。

以上が、謎の〝エイト・フォー〟に関する手がかりである。

B29が単機で飛来して上空を旋回したり、数発の爆弾を投下するなど奇妙な行動をとった時、当時の日本人はこれを「地獄の使者」とか「悪魔の使い」と呼んで恐れていた。〝エイト・フォー〟の行動は「地獄の使者」「悪魔の使い」と似ているのである。

太平洋戦争中、「帝都防衛」の任務をおびて陸軍飛行第五三戦隊（B29邀撃（ようげき）夜間戦闘隊）の松戸基地において、来る日も来る日もB29の行動を観察して文庫本の余白に記録していた男がいた。原田良次である。原田のこの記録日記には、一九四五（昭和二〇）年二月二日と三

月八日の項に次の記述が見える。

二月二日　雪　二〇〇〇（二〇時〇〇分）ごろ関東西部にB29一機来襲、警急隊四機出動。……この来襲一機は気象観測機ならん、これは「地獄の使者」なり。近くまたはげしい敵来襲が予想される。……二〇〇〇（二〇時〇〇分）B29一機は東京上空に在り、照空灯の光芒急ぎ空をまさぐり、高射砲の迎撃音しきりなり。

三月八日　快晴　一〇〇〇（一〇時〇〇分）ごろ三回、B29一機で静岡より東京へ、偵察来襲。しかしこれは一機でも悪魔の使いだ。近くまた大編隊の来襲があるだろう。

〔原田良次『日本大空襲』上〕

ここで言う「地獄の使者」「悪魔の使い」とは、都市上空を二、三回旋回して航空写真を撮影したり、気象観測をすること、また、高射砲陣地の位置や角度など日本側の反撃力を試すために二、三発投弾したりするB29のことであった。これらはいずれも単機か、せいぜい二、三機で行動した。したがって、B29によるこれらの偵察行動は、やがて到来する大空襲の前触れとして、当時の日本人に恐れられていたのである。

一月一六日の京都へのB29単機飛来がこの「悪魔の使い」に当たるかどうか、即断はできない。人心を攪乱するための夜間攻撃であった可能性もある。もし、「悪魔の使い」であっ